東亜臨床心理学研究　VOL.21　2022（Pp. 11～19）

論　　文

「畑中美穂の村山語録 2021Ver.」：村山正治先生の足跡を辿る山の小径に纏わる小論

畑 中 美 穂[*1]・村 山 正 治[*2]

要　約

本稿は、心理臨床家の村山正治について記した「畑中美穂の村山語録 2020Ver.：一ゼミ修了生からみた村山正治先生の教育スタイル」（畑中・村山, 2021）の続編である。村山が京都大学生時代を過ごした京都に纏わるエピソードを軸に、村山の臨床観を育んだ背景について探索的に綴ることを試みた。村山の、心理臨床家として、また教育者としての現在の在り方の礎となった京都大学生時代の経験は平坦であったとは言い難いが、現時点から振り返り村山にして『*魂を休ませてくれた大事な場所*』と言わしめる。「自分自身になるプロセス」（伊東・村山, 2001；村山, 1967）を具現化して歩んできた道のりを示すものとして含蓄に富むものである。

キー・ワード：村山正治、語録、京都大学

Ⅰ．はじめに

心理臨床家の村山正治先生はなぜ、「人を大切にすること」、「その人がその人らしく生きること」を重視されるのだろうか。2013 年 4 月～2018 年 9 月に東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理学専攻の村山ゼミに在籍した畑中（以下、私と記す）からみて、先生の活動に共通するキーワードは『一人一人を大切にすること』と『コミュニティ』であるがその土台の一端であり、一端でありながらコアとなっているのは京都大学生時代の生活体験によるものと推察する。私がゼミ生時代に度々耳にした先生の言葉の一つに『てめえの得意なことで勝負しろ』との言葉があるが、これは“先生ご自身が”、『てめえの得意なこと』で生きてきたこと、生きていけばいいのだと実感しておられることを思わせる。また先生のこの実感を通して発せられる『弱さ（を認めること）は強さなんだ』との言葉は通常、口にするには勇気が要るが、同時に「だからこそ」の強さを感じるものである。人によっては村山先生に対して穏やかで柔らかな印象を抱くことと思うが、ゼミ生としてそのもとに学んだ者には先生の「ここぞ」という凄みを感じる、“らしい”言葉でもあると思う。

本稿では、村山先生が京都大学生時代を過ごされた京都に纏わるエピソードを軸に、先生の教員としての在り方を含めた臨床観を育んだ背景について探索的に綴ることを試みた。心理臨床家としての《村山正治》の一端をあらわすものとなることを望む。なお村山先生の言葉を『　』、固有名詞としての Rogers 個人を指すのではなく概念としての Rogers を表す場合に《Rogers》と記す。

[*1] 心といのちの性教育研究所/Lab. for psychological sex education, Mind and Life
[*2] 東亜大学大学院 総合学術研究科

Ⅱ．足跡を辿る山の小径

2021年10月の末、私は2年ぶりに京都に帰省して実家の裏にある山を歩いた。窓を開ければ目にする山ながら、前回はいつ登ったのかも覚えていない。しかしその日は、好きな寺に行くには時間が足りず、じっとしているにはもったいない気持ちよく晴れた午後であったので、ふと思い立ち出かけることにした。実はこの山は、お盆には送り火が焚かれる大文字山に連なり、京都大学生時代の村山先生が下宿をされた家のある山である。その家が現在も在るのかどうかはわからない。山中にある幼稚園の園長からの借家であったとゼミで何度か伺った。何年か前にご夫婦で京都にお出かけになった際にはこの辺りも歩かれたそうであるが、当時の下宿にたどり着く道は塞がれていたと聞いた。

今回の散策では、まず家々の並ぶ表道から登って山頂近くにある幼稚園を目指した。幼い頃は遊び場の一つでもあったが、久々に上ると、これほど景色のよい所であったか、京都の街並みが眼下に拓けて心地よかった。そして短い滞在の後、下山では別のルート（いかにも人気はなく鬱蒼としているが道標はきちんと掲げられていたので…）を歩いてみることにした。先生から伺っていたように、どうみても人が住んでいなさそうな辺りはこちらの方がみつけられそうであった。もはや探検である。深い樹に覆われてなんとも物騒ではあったが一応は舗装された道を下り、麓にある病院の敷地に出ることができた。この病院は私が産まれ、私もまた長女を産んだ場所である。懐かしい。結局、それらしき建物、つまり先生の下宿をみつけることはできなかった。この山のどこかですでに朽ちているかもしれないな…、などと思いながら、人通りのある場所に下りて来られたことにほっとした。

今回はこの小旅だけであったが、近くには先生に所縁の京都大学人文科学研究所もある。先生が気に入って出入りされた場所だと伺った。私は小学生の頃、この近所に住む友だちと辺りで遊んだり、学校の写生会で歴史ある美しい造形の建物を描いたりして過ごした。1970年代のその頃、先生はどこにいらっしゃっただろうか？　すでに九州大学に就き、CPS（Center for studies of the Person；Visiting Fellow）のRogersのもとから戻られたばかりの、第一線でご活躍の頃であっただろう、現在、先生とご縁があるようになることなど想像も及ばない頃のことである。ともあれ、この地で先生は“山に籠り”、思索を巡らせ、悩みや絶望を感じられたかもしれない、しかし希望ももって、今に続く歩みを始められたのだと理解している。私にとってこのように身近な場所に、先生にとっての重要な場所のあることに驚きと感慨の念を抱く。今回の散策のことを、後に先生にご報告をした。すると先生からは以下のような返事をいただいた。

『（最寄りのバス停は）○町の市バス終点でした。数年前、京都出身の院生の結婚式に招かれた時、尚子と「探検」してきました。山の家に行く道がなくなり、通行止めになっていました。園長先生の持ち家でした。○○さんもあの近辺の生まれと聞きました。何しろ、京大は私の魂を休ませてくれた大事な場所です』。

私はこの先生の文章を読んで、少なからず感動を覚えた。*『私の魂を休ませてくれた大事な場所』*。そのような場所が、誰にでもあるわけではないと思う。ゼミの折に先生から伺った大学時代の話は決して平坦なものではなかったのに、先生が*『魂を休ませてくれた』*とおっしゃることに感慨を深くする。哲学を学ぶことに悩み、教員からは「ムラヤマは自殺をするのではないか」と心配されたこともありながら、先生はこの地で“生きることについて深く考える機会”を与えられ、やがて道を見出して歩み出された。そのご経験は先生がその後、《Rogers》に出会われ、心理臨床家として歩まれ、教員として学生の前に居られることにすべて結びついてゆくのである。そして先生が今、そのようにお感じになっていることを思うと、私自身の来し方についても、今の土地に暮らしてやはりよいことばかりではなかったけれども、大学院で

先生のもとに学び、“生きることについて深く考える機会”となっていることに縁を感じる。私も先生のようにいつかどこかで、今の暮らしを“魂を休ませた場所”として在らせることができるようになるのかもしれない。そのように思うと、生きることは深々とした想いを味わう希望を持たせてくれるものだなぁ、と、先生の言葉にしみじみと思う。

Ⅲ．*『魂を休ませてくれた場所』*―“てめえ”を育む時機についての思索

・なぜ先生は『てめえの得意なことで勝負』することが大事だと言われるのだろうか？　そしてその“てめえ”を育むとはどういうことだろうか？

個人的なことになるが、私は社会人学生として大学院に進学することで、自分の関心のために、自分の必要に従って学ぶという贅沢に恵まれた機会を得た。しかし同時に、この時期は自分の人生の過程においては諸々の苦痛を伴う時期でもあった。日々手一杯で、大学院生としての自分とプライベートな事ごとは切り離して考えてはいたが、現実的には時期は重なっており、再び学ぶ環境にある高揚感の一方で、一般に「mid-life crisis」といわれる時期にあったことも思う。自分の感覚が概念に縛られることを避けたいのでこの言葉を用いるのに躊躇するが、それは特に日本語で「中年期危機」と言ってしまうと、自分の体験について、その「時期」の方に目が向いてしまい勝ちになることを恐れるからである。「時期」といった「時間」や該当する「年齢」のことではなく、また、症状のように列挙される「事ごとの一覧」の一括りではなく、人に起こることはもっと個人的な、“或る状態”とみる方が実感として捉えやすい。そのような意味で、「Transitions」という言葉は私には用いやすい。そしてこの Transitions を用いると、村山先生の京都大学生時代についても例えば「モラトリアム」といった言葉ではなく、また現時点から振り返って先生ご自身が*『魂を休ませてくれた場所』*と言われることに、しっくりと馴染む感じを持つ。Bridges（倉光・小林，2014）は、彼の理論における「Transitions」について、「Transitions は、生きる方向を見失ってからそれを再発見するまでの、自然なプロセスと見なされる。それはまた、成長過程の中でのターニングポイントでもある」と述べている。そういった文脈で「crisis」を用いるならば、先生の京都大学生時代にも“危機”は包含されており、恐らく、そういった時機には人は大なり小なり、孤独を感じるものなのではないかと思う。孤独という言葉にもそれを感じるその人その人にとっての定義がされるものと思うが、先生の場合にはもしかしたら、学問的なものからの孤独も味わっておられたかもしれない。私自身について言えば、家族があり親しい友人がいても、そういった時機に感じる孤独は何を以てしても“独り”なのであり、どうにもしようがないといった感じである。

さて私にとってのその「底」とも言えるような時期は、大学院の修了に合わせて訪れた。2018 年秋に博士課程を修了して一年程は気が抜けたようであった。大きな目標であった博士論文を書き終え、しかしそれ自体は何にどのように役立たせるというものでもなく、何より私には、大学院を離れるという居場所の問題が自分で想像していた以上に大きなものであった。巷にロスと言われる状態でしばらく過ごしていたのであるが、そうしているうちに、年が明けてすぐに父が亡くなり、春には 20 年飼った猫が、夏の終わりには慕っていた伯母が亡くなった。文字通り喪失の一年であった。また様々なことでの行き詰まりもあり、その一つに、村山先生から本を書くことを勧められたがどうにも進まないということもあった。

ところがこの時期を含めた一連は、振り返ると実は、私にとって大きな意味を持つものであったと言える。様々な形での喪失や行き詰まりは苦しいことではあったが、私の感覚から言うと「底を打ったら上がるしか」なく、恐らく多少は上がりかけた時期にちょうど、COVID-

19 下での初めての春を迎えた。日常に家に“籠る”ことが推奨され、リモートワークが浸透し始めたことが幸いして、在学中の複数の現役ゼミ生から「畑中さん、オンラインのゼミがあるから顔を出して」と声をかけてもらった。その場で私は 2 度、自分の発表の機会もいただき、先生とゼミ生から多くの学びを得た。メンバーは全員が社会人で見知った顔ぶれだったこともあり、《Rogers》について語りながら実質は、それぞれの生き方や、生や死といった哲学を語り合う場であったと私は感じている。またこの過程で、私は“Rogers 先生”に“出会う”体験をしている（畑中・村山, 2021）。

このようなことがあるとは！　大学院在学中を通じたこの時機は、私にとっての Transitions でもあったのだ。ゼミ生の頃には《Rogers》の環境にありながら学びもしなかった私が、大学院を修了して、自分の生き方につまずきや挫折を感じ抱え持ちながらも歩むことで、ふと顔を上げると《Rogers》が見えた。それは村山先生が、修了生に対してもいつもゼミの扉を開けておいてくださったことや、この時のゼミ生が、研究者としても社会人としてもバラバラの立ち位置にありながらそれぞれにしっかりとしたものを持って、村山先生の傍に居て《Rogers》につながり、バラバラであることでのおおらかさのようなものがあったからだろうと思う。発言する言葉は時に厳しいのだけれども、論は論、人は人、といったようなドライさがあって率直なやりとりができる場であった。そういった雰囲気を私は居心地よく感じたし、こういう時の村山先生はあまり発言をされず、院生がわぁわぁ言うのをじっと聴いておられて最後の方で少し、話をされた。私が在学中のゼミでは先生が話される時間も多くあったが、この年のゼミでは、発表者は自分の研究について話しているのだがよく聴けば、「その人を語る」ことをしていた。先生はゼミ生にそのように場を任されていたし、先生ご自身がリラックスしてその場におられるようにも見えた。これは私が親しんでいるヨーガで言えば、「余分なところに力が入っていない」というような感じである。集中を要するものでもある。この頃にいただいた先生のメールには次のように書かれている。『今のゼミの皆さんのふれあいゼミ、「耕育ゼミ」の力も感じます。最近、教師は農夫の側面を持って生きていくのかなと思っています』。このような環境のなかで先生はご自身の「自分の内側にある力」について語られ、先生にとってのそれは『自分の弱さを受け入れること』であり、京都大学で哲学を目指し心理学に転向する過程で学ばれたこととしての『今の哲学』であると話された（畑中・村山, 2021）。

ここでふと思うのは、先に述べたような“独り”の経験をもつ者は、その“感じ”がわかるゆえのものの見え方ができるかもしれないということである。孤独にあるクライエントの感じに沿いやすいかもしれないし、また、言葉を「独りで居ること」に置き換えることでも様が違ってみえる。物理的にだけではなくむしろ精神的な意味で、「人とつながること」にも関係してきそうである。奥深い、“人の、或る状態”のように思う。先生が院生に『てめえの得意なことで勝負しろ』とおっしゃるのは、先生が京都大学生時代に“独り”の時間を持つなかで思索を深め、“自分を護るための策”として編み出された感覚であるかもしれず、そのことが『弱さを認めること』の『強み』という現在の村山哲学と結びついているのではないかと感じる。また“独り”の一形態としての“籠る”ことへの理解がスクールカウンセラー事業を推進するひとつの力ともなったであろう。そのような意味でも京都の山の家は、先生にとって多くの意味をもつ“学び舎”でもあったのではないか。グループへの『天の岩戸方式』と呼ばれる参加の仕方などにも、先生の長く深いご経験からの、誰をも取りこぼさない、ユーモラスでさえある優しみを感じるのである。

Ⅳ．なぜ、人とつながることが大切なのか？

・なぜ先生は人とつながることを大切にされる

のだろうか？　（これはゼミのあり方にもつながることであると思う！）

実はこのことはまだよくわからない。Ⅲで述べたように、私にとっては村山ゼミでの体験は貴重であったし、一般的な意味での重要性はわかるが、人とつながることの本質的なことについて私は、より深いところでの理解ができているだろうか？　ただ、それを解くカギとなりそうなのは、「先生がなぜエンカウンター・グループ（以下、EG と記す）を大事にされているか」というところに“私が近づいてみること”である。私自身が初めてベーシック・エンカウンター・グループ（以下、BEG と記す）に参加をしたのは、まだほとんど EG についての予備知識がない院生の頃であった。まずは素の感じで体験をしてみたかったということがある。この時の体験は畑中（2018）に記しているが、ひと言で言えば、「それは決してよいものではない」どころではなく「サイアク」であった！　予備知識がないとはいえ村山先生のゼミ生である、EG の目的や形態、ファシリテーターの役割などについての大まかなイメージくらいは描けていた。しかしながらそこでは、中座したくなるような乱暴な言葉のやりとりがあり、明るかった同室の女性はふさぎ込み、私自身、大いに混乱し怒りに満ちた経験となってしまった。数年経ってもあの時に起こったことの意味がわからず気持ちが整理できずにいるのである。しかし同時に私は、あの EG が懐かしくもあり、「どうしてあの場が私の“毎年帰りたい場”になり得なかったのだろう？」と考えているのである。

またそのグループに前後して、EG とは銘打たない 4 つの「グループ」に参加をした。2 回は増井武士先生のバリ島のヴィラに滞在してのグループであり、2 回は、村山先生の海に近い山荘でのことである。銘打たぬながらも増井先生は「僕なりの解釈の、これは EG」であるということをおっしゃっていたし、村山先生は Mr. facilitator（畑中・村山, 2021）である、逆に「EG をします」と宣言されないことでの緊張感を強いられない形が、先生ご自身をも緊張から解いていたのではないか。2 回ともが実に充実した楽しい滞在であった。ただ、1 回目が終わった後、私があまりに感激していたので、先生は『いつも起こることではない』とぼそっと釘を刺されたことがあった。しかし 2 回ともがそうであったので…。『いつも起こることではない』ことが自分には 2 回も起こったということは、私は「ラッキーだった！」と単純に言えるものだろうか？　あの場は一体、何なのであろう？

いずれにせよ、私にとって EG に戸を拓くことは、何かとても重要な意味のあることではないかという気がするのである。初めて参加した BEG で、その体験が長く整理できずにきたのであるが、今、やっと戸が拓かれる（自分を拓いてみよう、という）感じがしている。それは自分自身の生きている過程にも関わる部分のことかもしれない。（自分の感覚としての「今」は、「信じられる自分」や「力」、自分に起こることへの楽観的な信頼、といったようなもの―。うまく言えないが）。一連のことが、何かとても、意味のある、大事なことのように思うのである。あのグループの間に感じたことも、なぜそうだったのかについても、「あれは一体何だったんだ？」という想いを長く抱え続けていたことも、今、戸が拓かれかけているように感じることも、これからの私にとっても。すべてはこれからのことである。

Ⅴ．EG、その他についてのメモ

・EG について、また関連して、フォーカシングとマインドフルネスストレス低減法（Mindfulness-based stress reduction : MBSR）について、現時点ではまとまりきらないが自分にとって重要に思える事ごとについて以下に記しておく。

村山先生が『本書を読んで考えたこと』として文章をお寄せになった本「“深い関係性”がなぜ人を癒すのか　パーソンセンタード・セラ

ピーの力」（中田・斧原，2021）の「セラピストの成長課題」の章に、EG について書かれた箇所がある。Mearns による「規範づくり（norming）」についての文章や、Mearns の初期のグループ経験として書かれた「EG は私が自己一致を“勝ち取った”場である」との一文を読んで、私が数年もの間、自分のグループ参加体験を苦々しく感じてきたのは、全くの自分の内側の事情かもしれない、と思った。つまり私は、思うに「“ファシリテーターなのに”どうしてあんなに攻撃的だったのだろう」ということを最も不快に感じており、しかしそれは私のなかに、「EG とはこういうものであるはずだ」というイメージがあったことによるものではないかと思う。もっと言うと、EG は「自分を成長させてくれるもの」であるとか、「よい体験になるはず」ということをどこかで“期待”させ、ファシリテーターによってそれが“妨害された”ことにより「どうしてぐちゃぐちゃにしたの？」という気持ちが怒りとして感じられたのだろう。しかし私は、あの真っ只中でその怒りを“ちゃんと”表明してもいる（畑中，2018）。そのことで場はより「ぐちゃぐちゃ」にはなったかもしれないが、もしもあの場で私が怒りを表明していなかったら、私は自己不一致を自分に強いたまま、顔ではにっこりとして「よい体験でした、ありがとうございました」と最終日にメンバーと別れ、後にそのことで余計に苦しむことになっていただろう。そしてこれもまた、Mearns のいう「規範」のあることを前提にして参加していたことの証左かもしれない。

とすれば、私はあの時のあの場での“居り方”は恐らくあれでよかったのであり、ただもしも今、同じ場に居るとすれば、多少はうまく、その不快な感じをどうにかすることができるのではないかという気がする。例えば、「どうしてそんな攻撃的な言い方で○さんに迫るのですか？」ではなく、「ちょっと今、この場の感じは嫌な感じなんだけど…」といったように、中身に入るのではなく“そこに居る今”の感じをもっと大切にするとか。そのようにすることで、自分の不一致をきちんと感じることも、「良き参加者でいよう」とすることでの自分の感情を無視するといったことを回避することも、「それでもきちんと対峙（山のように）をするのだ」といったある種の相手に対する誠実さを示すことも、できるかもしれないと思う。また別の見方では、「あの態度は、ファシリテーターがご自分の自己一致を大事にされたからかな？」とか、「ファシリテーターである前に自分、という在り方でおられたということだろうか？」、“ほら、「最上のファシリテーターは、そのグループにとけ込んでいる」（畠瀬・村田，2006）というではないか…”。そういった捉え方が（チャレンジとして）できるかもしれない。あるいはそれを直接、その場で尋ねてみてもいいかもしれない。とにかく私は、今の私であれば反射的に反応してしまうのではなくもう少し自分の感じ方を大切にした“遣り方”をするのではないかと思う。今、EG に参加してみたい。外に在る何かを「期待する」のではなく、どのような自分、がそこに在るのかをみてみたい気がしている。

ところで私にとってそのグループで救いとなったのはコ・ファシリテーターの方に信頼がおけたことであった。コ・ファシリテーターについては村山先生がその存在の重要性について述べておられるが（村山，2005，2014）、要は何が起こるかわからない、またはファシリテーターが自分には対応できないことがあった時にグループを一人では抱えきれないのだとおっしゃっていた。あのコ・ファシリテーターの方は、あの時のグループにどのような感想を持っておられるだろう、いつか伺ってみたい気がする。そしてやはりいつか、ファシリテーターの方にも。そのような“時機”が私にめぐってくることを望む。

さて。私が参加している MBSR のプログラムで、「それはそれとして」という在り方が語られるのであるが、そのように、EG にも何かの「期待」を持つのではなく、ただそこに在る自分を、そして自分の感じ方を、“感じる”ことに注意を向けてみればまた何か違った体験に

なるかもしれない。また感じ方に注意を向けるということでは、もしかしたらフォーカシングにも繋がるものがあるのではないかとも思っている。この探索を通して今、私は、あの時に「不快」と感じた体験を消化していくプロセスに在ることを感じている。そして新たな自分の在り方で EG に参加してみたいという思いをもっている。これは多分、あの体験をここまで抱え持ってきた自分に与えられた、EG に再び出会うチャンスなのだろうと思う。

Ⅵ. おわりに

それにしても。

あの山のなかにひとり。その頃の風景として、今の先生にはどのような景色が瞼に浮かぶのだろうか？　今回、私はその山を登りながら、秋の気持ちよく晴れた日の午後に眼下に広がる景色を眩しく感じた。自分らしさの感覚を取り戻しつつある今の、晴れ晴れとした感じをもって眺めた。しかし当時の先生は？　家の窓から差し込む光を、感じておられただろうか？　その場所で先生は、ご自分の土台を、創ってこられたのだと思う。そして文字通り“山を下りて”来られ、現在に続く道を歩んでこられた。

先日、夕方に散歩をしていて思い浮かんだことがある。人、例えばクライエントに「何を見ましたか？」といったひとつの感覚器（ここでは眼）に頼る尋ね方ではなく、「それはどのような風景でしたか？」と尋ねることで、見たものだけではなくにおいや色や音や温度や人さえも、思い浮かべることができるのではないか、ということである。そのように問われ、自分の体験を感じとして表すことで、表現が促進され、心が動き出すことがあるかもしれない。以前、あるアートセラピーのワークショップで出会った一人の物静かな参加者の方が、それぞれが自由に絵を描く時に遠方にある故郷の絵を描き、グループのなかでいきいきとした語りをしたことがあった。ほとんど口を開くことがなくいつも何となく場違いなところにいるような困った表情をしていたその人のなかで、あることをきっかけに、心のなかの“風景”が動きだしたのだろう、その姿には何かちょっと、感動をおぼえた。池見陽先生は増井武士先生との対談のなかで、「“言語化”とか“表現”とかいうのが（略）“内から外へ”という一方通行で考えられているけれども、実はその逆のほうが多くて、言葉が気持ちを呼び覚ますとかね。感じていることをとりあえず言葉にしてみると、その言葉が気持ちを呼び起こしてくる。呼び起こされた気持ちがもともと言いたかったものとずれてたら、言葉を訂正する。すると、訂正されたその言葉がまた何かを呼び起こしてくる。だから、ここには言語化と、その反対側があるんですよね」とおっしゃっている（増井・池見, 2020）。物静かなあの方は、その時、私にはみえない何をご覧になっていたのだろう、私は柔らかな風を感じた。

村山先生が住まわれたその家が、先生にとって安全な基地であったことを願う。少なくとも先生にとって京都大学は、*『私の魂を休ませてくれた大事な場所』*であったのだ。九州に移られてからも京都に来られることはあっただろう、若い日の先生と、もしかしたら幼い頃の私は道ですれ違っていたかもしれない。その土地で、『僕の今の哲学』と言われる『自分の弱さを受け入れること』の自己肯定の礎が、育まれたのである。

文献

Bridges, William. (2004). TRANSITIONS,2ND ED Makings Sense of Life's Changes. Da Capo Press.（倉光修・小林哲郎（訳）(2014). トランジション　人生の転機を活かすために. パンローリング株式会社）

畑中美穂（2018）：エンカウンター・グループ　初めての参加経験と“気づき”などへの気づき. 東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要　心理臨床研究　―臨床・リサーチ・理論―, 18, 21-25.

畑中美穂・村山正治（2021）：「畑中美穂の村山語録 2020Ver.」―ゼミ修了生からみた村山正治先生の教育スタイル.東亜臨床心理学研究, 20,

11-23.
Kirschenbaum, H. & Henderson, V. L.（Eds.）（1989）. The Carl Rogers Reader. Mariner Books.（伊東博・村山正治（監訳）（2001）. ロジャーズ選集（上）（2001a）/（下）（2001b）. 誠信書房）
増井武士・池見陽（2020）：治療的面接の工夫と手順　人間学的力動論の観点から. 創元社.
Mearns, Dave. & Cooper, Mick.（2018）. Working at Relational Depth in Counselling and Psychotherapy 2nd Edition. Sage Publications Inc.（中田行重・斧原藍（訳）（2021）.「深い関係性」がなぜ人を癒すのか　パーソン・センタード・セラピーの力. 創元社）
村山正治（編）（1967）：ロージャズ全集 12　人間論. 岩崎学術出版社.
村山正治（2005）：ロジャースをめぐって　臨床を生きる発想と方法. 金剛出版.
村山正治編（2014）：「自分らしさ」を認める PCA グループ入門　新しいエンカウンターグループ法. 創元社.
Rogers, Carl. & Freiberg, H. Jerome.（1994）. Freedom to Learn 3rd Edition. Pearson Education Inc.（畠瀬稔・村田進（訳）（2006）. 学習する自由　第 3 版.コスモス・ライブラリー）

MURAYAMA's Analects, 2021Ver.
――By Miho HATANAKA――

Miho Hatanaka[*1] ・ Shoji Murayama[*2]

Abstract

This paper focuses on the background that lead to Shoji Murayama's perspective on clinical psychology, based on his stories in his university days. According to him, those days were not easy, but it was the very time that allowed him to cultivate his perspectives. In the end, it became his foundation as both psychologist and educator. His life is the exact realization of the theories that Rogers had proposed.

Key words：Shoji Murayama, analects, Kyoto University

[*1] Lab. for psychological sex education, Mind and Life
[*2] Graduate School of Integrated Science and Art, University of East Asia